

敗戦

空襲の翌日。親族の安否を尋ねて父と一緒に横浜の廃虚を歩き、無数の死体を見た。川に浮いた土左衛門。黒光りした焼死体。それらがトラックの荷台に積み上げられて

私の履歴書

子 恵 岸

④

天皇陛下の写真で実感

直立不動でマッカーサーと

昭和天皇がGHQ（連合国軍総司令部）の最高司令官ダグラス・マッカーサーと対面した写真を見た時だった。

ゆく。その都度、父が私の目を手で覆ったが、それでも私は見てしまった。前日まで生きていた人たちのすさまじく変わり果てた亡骸を。

高台にある掃部山公園に着くと父が「これが井伊直弼の銅像だ」とつぶやいた。その銅像よりも、私は掃部山を含

む野毛山から海までが見渡せる街全体が平べったい瓦礫となって燃え続けている眺めの方にむごたらしさを感じた。空に腐った柘榴のような黒い太陽が血の色を刷き、瓦礫から生き物が焼けただれた臭いが漂う。戦争がもたらす実態をまざまざと見せていた。

敗戦を実感したのは8月15日の玉音放送ではなかった。9月27日、赤坂の米大使館で

列車で買い出しに行った私は、人々が背負っている食料を慌てて車窓から捨てているのを見た。闇物資の摘発を逃れるためだ。無情に捨てられた食料は線路脇に待機した人たちが奪ってゆくに違いない。

ある時、買い出しの収穫がなくて母としょんぼり歩いてみると、米兵を満載したジープが脇に止まり、チョコレ

トの包みを私にくれようとした。母の硬い視線に躊躇している私を見て、米兵は缶詰が入った紙袋を道端に投げて笑

いながら「バイイ」と走り去った。夢中で駆け寄った私の頬に母の平手が飛んだ。

「だって……」「いけません」私は米兵が投げた紙袋を見ず、前だけを見つめて大股の速足で歩いた。意味の分から

ない涙が頬をぬらした。戦後の復興は早かった。ガード下にうずくまる戦争孤児たちに白い粉末の殺虫剤DDTがかけられ、そこに熱気が渦巻く闇市が立った。

「いざ来いニミッツ、マッカーサー。出てくりや、地獄胃けいれんを起こした。「胃がビクビクして空風呂を炊いたんだろ」と父は言った。学校で堂々と蓋を開けた同級生のお弁当が白米に青菜まで添えてあるのを見て、私はふかしたサツマイモだけのお弁当を蓋で隠して食べた。



空襲で焼けた横浜市街（1945年）

混乱に乗じて巧みに財を成した者もいれば、父のように清廉を貫いた人もいた。そんな父を清々しいと誇りに思ったり、頼りないと思ったりした。

父は栄誉栄達に関心がなく、多趣味に明け暮れた人だった。県庁にテニス部を創設し、岸杯という対抗戦を主催した。琵琶を弾き語り、三味線や小唄もう

へ逆落とし……」と歌っていた日本人はあっけなくマッカーサーになびいた。変わり身はあまりにも早かった。

我が家ではサツマイモの茎が主菜のおかゆを父が端然とすすっていた。私はチョコレートケーキを食べた夢を見てくれた。

（女優）